

る必要があります。旅行外来では、英文の診断書を作成し、薬が足りなくなったときなどに現地で処方してもらえるようにしています。

私は、今年3月まで、熱研外来（海外旅行外来を含む）の担当日以外は、救命救急センターに勤務していました。途上国で何らかの貢献をしたいという思いで、私は医師になりました。世界のどこでも役に立てるために、大学卒業後は救急対応ができるよう循環器科で研修を受け、その後、長大の熱帯医学研究所に勤務し、ベトナムやエチオピ

アでも診療の経験を積みました。

現地で実感したのは、感染症が大きな問題になっていること、それらの地域でまん延している感染症に日本人は弱いということです。そうした地域に出かける人が健康に不安を感じることなく、旅行を楽しんだり、仕事に励んだりすることを今後も支えたいと思います。

次号（2018年6月号）では「熱帯医学研究所原虫学分野」を取り上げます。

身の回りの動物を感染症から守る

ネコやイヌなど身近な動物のマダニ予防にも注意しましょう！

私たちが野外で活動する機会が多くなる初夏を迎え、マダニが媒介するさまざまな病気にも注意する必要があります。長崎大学熱帯医学研究所では、このうちの一つ、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）についての研究や調査を行っていますが、最近、人間だけでなく、飼いネコもSFTSを発症していることが明らかになってきました。

この調査のきっかけとなったのは、昨年7月、「野良ネコに咬まれた女性がSFTSを発症して死亡した」という報道があったことです。この報道を受け、山口大学や国立感染症研究所が中心となり、ネコのSFTSへの感染事例の調査を開始しました。熱研も、公益社団法人 長崎県獣医師会の協力のもと、今年4月から本格的に、長崎県における事例収集を開始しています。

この結果、明らかになってきたことは、ヒトばかりでなく、飼いネコもSFTSを発症していることがあるという事実です。実際、今年の4月から、長崎県下の動物病院に来院したなかで、すでに10件の感染が確認されました。

SFTSを発症すると、ネコの場合もヒトと同じように発熱や嘔吐、下痢などの症状が見られ、死に至



長崎で採取されたフタトゲチマダニの雄の成虫

ることもあります。感染したネコから飼い主にうつることは明らかになっていませんが、危険を避けるために、体液や糞尿などを処理する場合は、手袋を着用し、処理した後は動物の体液が触れた部分をよく消毒してください。また、飼いネコなどが体調不良の場合は、すぐに、動物病院で診てもらうことをお勧めします。

何よりも大事なことは予防です。SFTSに有効なワクチンはまだ開発されていませんので、マダニに刺されないことが、予防の決め手です。動物用のマダニの忌避剤は動物病院などで購入できます。可愛いペットが、SFTSをはじめとするマダニが媒介する感染症にかからないようにするために、定期的を使用することをお勧めします。